

日本ジオパーク・モデル化研究会についてーその設立の趣旨ー

社団法人国土国土政策研究会会長・元国土交通副大臣 岩井 國臣

ジオパーク（Geoparks）設立に関する活動が内外で活発化しています。ヨーロッパや中国などを中心に、ユネスコに支援された世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network）が認証する世界ジオパーク（Global Geoparks）が既に17カ国の53地域に設置されています。ジオパークの目的や意義を鑑みると我が国においても設置が必要となりますが、それには、まず、日本におけるジオパークの意義を確認し、そのコンセプト（基本概念）を皆で議論し、明確にしておくことが大切です。

21世紀は“ジオ（GEO）”の時代です。これからの地域づくりは“ジオ（GEO）”を強く意識した「人づくり」であり「場づくり」でなければなりません。“ジオ（GEO）”とは単に地質や地形のみならずそれを土台として密接に影響し合いながら存在し、変遷していく自然と人間を一体として捉えようとする新しい概念です。この“ジオ（GEO）”の概念のもとで、地域の優れた自然と人々の歴史や伝統・文化を素材とし、地域の固有性・独自性を主張する鮮烈なテーマを掲げて、今ある時・空を超えて宇宙と人類，自然と人間の歴史や文明とのかかわりについて、地質を中心にありのままの地域資源をビジュアルに演出した「場」がジオパークです。

我が国では地方の人口減少になかなか歯止めがかかりません。地域崩壊が始まっていると言ってもよいかも知れません。一方、地球規模での資源・エネルギー枯渇，環境汚染，地域間格差が加速しているように，市場経済に象徴される物質文明のいき詰まりは明らかです。サステイナブルな生き方を採るべき我が国にとって，地方や中山間地にこそ，再出発すべき日本の原点となる自然や伝統思想や文化が“ジオ（GEO）”の構造をなして温存されているのです。

我が国の未来のために、何としてでもこれからの日本の原点となるべき地方や中山間地を守り，過疎化に歯止めをかけなければなりません。そのためには，結局，地域住民自身が立ち上がるしかありません。問題は「人づくり」であり「場づくり」です。その最も有力な手段がジオパークであると考えています。もちろん「人づくり」，「場づくり」は都市域にも通じる問題であることは言うまでもありません。

ジオパークは，地域そのものが素材であり題材であり，地域住民自体が脚本家であり演出家です。総てありのままの地域が主役という意味でジオパークは一つの究極の活性化手法です。多様な自然と歴史・文化に恵まれた我が国においては，地方や中山間地はもとより各地のジオパークは，それぞれの地域が，地質を中心に，地球とか環境とか歴史とかを意識しながらも，地域特性を活かした市民公園として，いろいろと構想すればよいと考えています。地域住民の自由な取り組みと言うものがないと，面白くて奥の深い地域づくりはできません。

ジオパークは，もちろんユネスコに支援された世界ジオパークから，国立レベルのもの，都道府県レベルのものもあって良いし，市町村レベルのもの，地区レベルのものもあって良いと考えています。否，そうあるべきです。今，政府はVJC（ビジット・ジャパン・キャンペーン）を掲げて外国人観光客1,000万人／年を目標にがんばっていますが，目標としてはこれでも少ないと考えています。全国各地にジオパークが展開できれば，目標1,000万人を遙かに超えることも決して夢ではないでしょう。

日本は「文化観光」にもっともっと力を入れていかなければなりません。「文化観光」の最も重要な企てが“ジオ（GEO）”の概念を抛りどころとするジオパークであると考えています。内外からできるだけ多くの観光客に来てもらうためには，訪れる人々に，これからの生き方に重大な示唆を与えうると言うか，これからの新しい文明を創造するために役立つと言うか，そして，唯一日本のそして世界のその地域にしか存在しないとか，そう言った文化的価値と希少性の高いものを整備する必要があります。

日本ジオパーク・モデル化研究会は，地域の固有性・独自性に基づいた我が国にふさわしい日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を構想し，具体化していくことを目標にしています。本研究会では，ジオパークを幅広く，地質・地形・地理・生態・環境・人類史・考古学および地方史・民俗文化など，自然科学から人文・社会科学にいたる学際的な視点から俯瞰し，その中で地域に独自の「ジオパーク・モデル」を構想し，その具体化を図る上で不可欠となる「日本らしいジオパークのありように関する一定の考え方や手法を明確化して，日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を創発する」ための研究活動を開始しました。そのためには，行政・政界，業界・財界，学界など，あらゆる団体・組織の多くの人々との懇談・対話を通じて，広く見識を衆議することが大切と考えています。

さらに，地域の持続的発展に寄与し，内外の人々に受け入れられる日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の設置に向けた合意形成と制度設計を行う必要があります。そのためには，日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）について，①政策提言に止まらず，②議員連盟の組成，ならびに③『ジオパーク新法（仮称）』を視野に入れた国民的運動を展開していく必要があります。合わせて各層向け，マスコミ向け出版物などの上程，各種研究会や広報活動を展開して，もって我が国固有の日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）を内外に発信することが必要です。

21世紀を迎え，人類は資源・エネルギー枯渇や環境破壊など“地球と人間のかかわり”を根源とした深刻な問題に直面し，人々は地球に関心を寄せるようになりました。例えば，世界遺産も地学的観点から注目されるようになってきました。我が国では次の候補である小笠原が気になるところですが，ここではBoninites（無人岩と言う小笠原諸島の古い呼称に因んだ学名）と呼ばれる独特・固有の岩石に象徴されるジオテクトニクスの地学条件がその決め手になるのではと考えられています。さらには，Biodiversity depends on Geodiversity（地球環境多様性が生物多様性を決める）の言葉に表れるように，人間活動にかかわる気候変動や自然破壊など地球環境問題への理解は“ジオ（GEO）”の視点を欠くことができません。

日本ジオパーク・モデル化研究会は当面，ジオパーク設立に向けた具体的活動を展開していく過程において検討すべき諸問題・課題について，地域の人々や自治体をはじめ関係する多くの方々との語る場を早期に創設したい，そのためのモデル事業をどんどん増やしたいと思っています。皆さんのご理解とご支援，さらには積極的なご参加やご意見を期待しています。

日本ジオパーク・モデル化研究会の活動について

我が国のジオパークに関する取り組みは，日本地質学会，（独）産業技術研究所，（独）土木研究所，（NPO）地質情報整備・活用機構および大学地質系・観光系学科など，学会や研究機関において開始されています。また，優れた地質サイトを抱える白滝黒曜石遺跡・アポイ岳・洞爺湖有珠山・五浦海岸・秩父・小田原箱根・南アルプス・糸魚川・山陰海岸・石見銀山・四国・雲仙・天草御所浦・霧島など10数地域においてジオパーク設立を目指した活動が始まっています。

一方，国土交通省では，2007年度国土施策創発調査費による「四国圏域の総合交通ネットワーク及び地域資源を活用した地域振興策に関する調査」の一環として四国運輸局に「四国ジオパーク検討委員会」を設置し，新たな観光資源の創出につながるジオパークの形成とジオツーリズムの構築方法の検討を目的として「ジオ（地質遺産など）を中心とするジオパーク形成に向けての調査」を展開しております。

日本ジオパーク・モデル化研究会は，これらの取り組みや調査との連携を大切にしながら，同時に日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の設置に向けた幅広い合意形成と制度設計を行う観点から，その位置づけにおいて，①日本らしいジオパークのありように関する一定の考え方や手法を明確化した上で，②省庁横断的（国土交通省・環境省・経済産業省・文部科学省・農林水産省・外務省・内閣府など）で民・学・官にまたがる幅広い層との意見交換や議論を通じた，③日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の政策提言，④議員連盟の組成や立法化過程が必要と考えています。同時に，ジオパーク設立と運営のプロセスでは財源・予算化プロセスやボランティアなど人材確保は不可避な問題と捉えております。

従って，日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）の実現には，①国民各層からの幅広い支持，②しっかりした制度設計，③事業者への設置理念と手法の提示および実際の・実務的な支援・協力が不可欠と考える立場から，日本ジオパーク・モデル化研究会は，関係者・関係機関との密接な連携を図りながら，5ヶ年程度を目途に次を目標として活動します。

- 我が国にふさわしい日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）のありようについての議論と政策および制度設計への提言
- 『ジオパーク新法』創設
- そのための議員連盟の発足
- 地域活性化，VJC（ビジット・ジャパン・キャンペーン），環境保全，社会基盤整備，および学習・教育など，関連する諸施策・諸事業との接点の明確化と連携
- 日本版ジオパーク（J-GEOPARKS）実現への段取り計画と日程化
- 個別ジオパークの事業化と計画・設計手法の提示
- 個別ジオパークの事業化および運営に対する助言や支援
- シンポジウム，フォーラムなど研究会の開催，『日本版ジオパークとは何か（仮題）』など図書出版，Webサイトなど情報発信

実施中の事業化モデル研究の概要 ー素材とモチーフ（主題）検討ー

【広域地質・文化遺産モデル】：四国モデル

日本地質学史の宝庫であり，地質学の黎明期に世界に発信した我が国の地質学界が誇れる歴史と伝統を持つ地域です。空海，坂本龍馬，四国お遍路などの歴史・文化遺産を含めて，その情報発信と広域的インフラ整備が考えられます。

- 明治日本の地質学発祥の地である高知地方
 - ナウマンによる高知地域の調査
- 戦前の日本地質学
 - 佐川造山輪廻の提唱の模式地
- 戦後の地質学
 - プレート収束域における構造運動

【東アジア圏文化交流モデル】：北海道白滝黒曜石遺跡モデル

今後生まれていくであろう多くのジオパークの中にあつて，アジア規模での地域的広がりと専門領域性において，我が国屈指の幅広い視野のジオパークが想定できます。

- 白滝黒曜石は，当時にあつて強力な“人間活動素材”であったはずです。おそらく白滝黒曜石遺跡を中心とする一大文化圏『白滝黒曜石文化・経済・政治圏』を構築していたでしょう。白滝黒曜石遺跡が語る“ジオ（GEO）”の世界をそのような意味とスケールで捉えてみたいと考えています。
- そうすると，白滝黒曜石遺跡は今と未来にどうつながるのでしょうか。
- ①資源開発，社会基盤整備に止まらない，環境ビジネスや教育・観光ビジネスを含めた21世紀の地質（地球科学）産業の展開
- ②世界に向けた『白滝黒曜石文明圏』の発信
- ③“人間活動素材”としての白滝黒曜石の復活と地域活性化（黒曜石によるまちづくり）

- 【広域地質構造モデル】：関東山地秩父モデル
 - 地質学の黎明期に世界に発信した我が国の地質学界が誇れる歴史と伝統を持つ地域です。
 - 秩父“古生層”発祥の地（模式地），和銅開宝の銅鉱床と三波川變成岩類，恐竜化石
 - 丹沢山塊と伊豆島弧の衝突（プレート境界の諸地質現象）
 - 甲武縦断道と140号線（雁坂トンネル）
 - 原生林などゆたかな自然遺産
 - 秩父事件，秩父お遍路などの歴史・文化遺産

